

秘庫の中身（第一回） 光悦書状

文芸学部 文学科 准教授 井田 太郎

前口上

近畿大学中央図書館は、貴重な日本の古典籍を多数収蔵している。

しかしながら、現在の図書館の貴重書の収蔵庫には湿度の管理システムがない。現状の立派な書架にはガラス扉があるが、これも温湿度管理の面からいえばよろしくないものである。最悪、蒸れてしまう。書棚は無害の塗料を塗ったパンチングボードなどが望ましく、部屋をまるごと温湿度管理する発想が現代の文化財管理の定石である。さらに、不用意な破損を防止し、虫害をさける前室もない。梱包したり、開梱したりするスペースとしても必要なものである。セキュリティ面からも問題がある。あるいは、虫害処理室もない。市場から買って来た書物は虫害の処理などなされていないのだ。それゆえ、現在は外部委託しているわけだが、これも常設した方がよい。それらは図書館員の努力でやるべきものではなく、ハードで支えるべきものである。

こういったハード面でのゆゆしい事態は、「中にある資料が、どのくらい貴重なものであるか」ということを知らないからであろうと考える。また、こういう文化財などの管理は建築でも専門的な領域になるので、一般にデザインに専心したい建築家からは忘れられがちである。こういう地味だが重要なところをケアしてもらわなければ、劣化が進行する。古典籍のことなど、特に忘れられる恐れがあるので、あえて記す。

近い将来に建つ図書館にそれらが完備されることを切実に祈りつつ、本稿は四十四号掲載の拙稿「秘庫を開く」を承け、シリーズ化（毎号が隔月号、あるいは不定期連載かは不

明）して「秘庫の中身」と題し、どういう古典籍があるかを述べ、重要性や意義を述べる。学内でも存在を知らない人が多い本館所蔵の古典籍を大事にしてもらいたいという一心による。

光悦書状

本館は「光悦書状」を所蔵している。おそらくは嵯峨本に関連する資料として購入されたものと推察される。かつて『香散見草』二十二号（一九九四）の表紙表にカラー写真、表紙裏に翻刻が掲載されただけで、本格的に紹介がなされたことはない。いわば目垢のついていないもので、学界にも知られていない。

本阿弥光悦（一五五八～一六三七）はいわずと知れた日本文化史におけるビッグネームである。陶芸に、出版に、書にその名は轟く。

その書は独特の風趣を湛え、書状という実用のために書かれた本作にさえ看取できる。「咄」のおおらかでたっぷりした感じ、「通」のしんじょうの切れのあるバランスは、光悦が闊達に書を記し、俵屋宗達が下絵を描いた「鶴下絵和歌巻」（京都国立博物館蔵）や「蓮下絵和歌巻断簡」（諸家分蔵）に通じてゆくニュアンスをもっている。光悦の書状は三百通以上のこっているが、それらのなかの基準作と比較して、真筆とみなして差支えない。

書状中、古田織部（一五四四～一六一五）と本阿弥光徳（一五五四～一六一九）がでてくる。織部を古田織部とみるか、別とみるかは考慮の余地があるが、敬称がつけられていることや文化圏から判断して古田織部とみて妥当であろう。現時点の研究ではそのように考えられる。これらの登場人物から考えれ

ば、織部が切腹した慶長二十年（一六一五）六月以前のもものと絞れる。慶長十七年（一六一二）五月八日と考証されている「織部宛光悦書状」が存在していることも附記しておく。織部は大名にして利休七哲にも数えられる高名な茶人で、光悦は織部に茶の湯を師事したとされる。光徳は本阿弥本家の人で、光悦の従兄にあたる。妻は光悦の姉妙光である。家職の刀剣目利を行ったほか、松田流軍学の師範でもあったという。

書状からは、光徳のもとに織部がやってきたことがわかる。どんな会話がなされたかはわからない。洛北の鷹峯に土地（のち、光悦村と呼ばれる）を拝領したのは元和元年（一六二〇）であるから、それ以前の別の場所である。掛幅装となった現状では宛書部分のみ見えなくなっており、誰に宛てた書状かはわからないのは残念である。どちらかというところ丁寧な筆蹟であり、目上の人に宛てたものかと推測される。

以下に書誌的情報を記す。

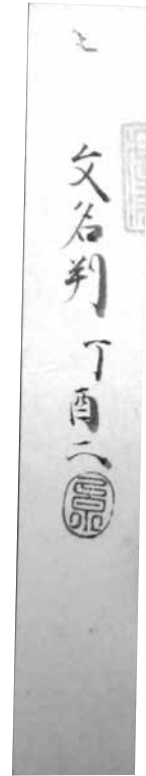
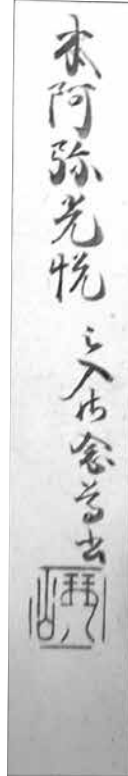
- 形状・品質 掛幅装 紙本墨書一幅（本紙 縦 28.3 センチ×横 44.5 センチ）
- 箱 小口貼紙「光悦／消息／織部殿／云々【朱文長方印「徑柴門】」
小口シール①「59.9./上野松坂屋／685」
小口シール②「59-1189」
- 附属物 A 「極札」（包紙あり。墨書一枚）
- 附属物 B 「光悦之事、八木先生より返事。並、探雪・有楽齋之事」（包紙あり。墨書一枚）

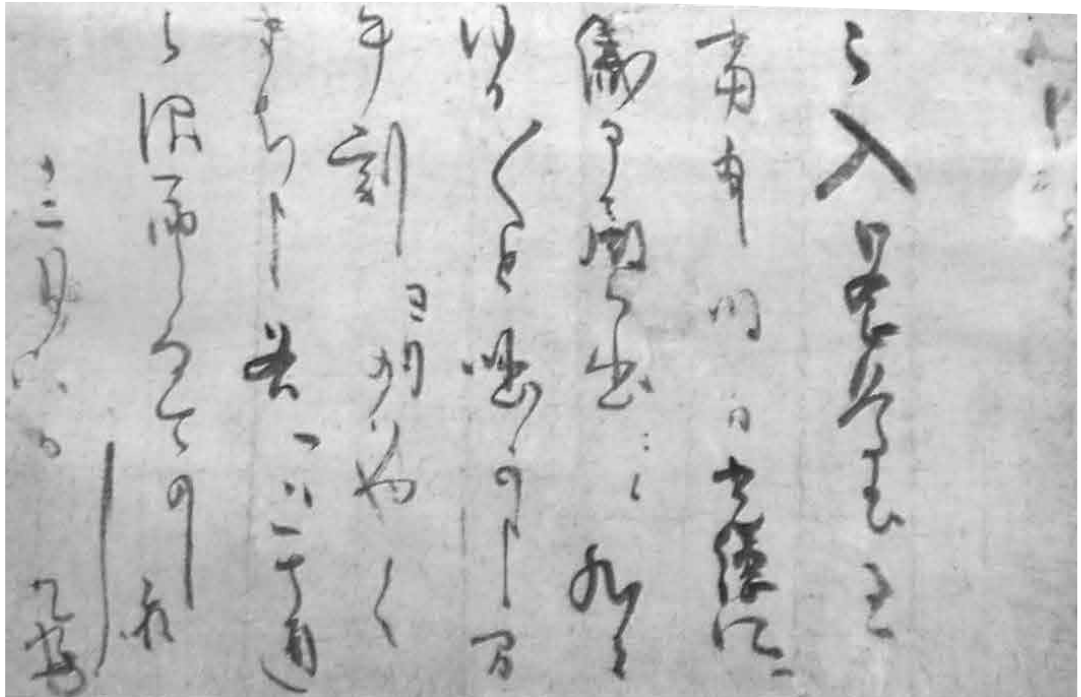
附属物 A（古筆家による極札）によれば、この書簡はすでに江戸時代後期には鑑賞の対象になっていたことが判明する。光悦・織部という桃山の二巨星がでてくる書状として賞美され、秘蔵されてきたのだろう。

なお、本書状は東京の五島美術館で開催される「光悦——桃山の古典——」展（平成二十五年十月二十六日～十二月一日）で初め

て学外にでて、多くの人の眼に触れることになる。

極札（両面）





翻刻

（端裏）（約四字分不明）

被入御念尊書過

当存候明日光徳所へ

織部殿御出二候九日

ゆるく咄可申候間

午刻ヨリ御ハやく

まち申候各へハ其通

被仰承候而可申候 恐惶

かしく

十二月六日

光悦【花押】